

18

2023年6月23日

医療の
小ネタ

医療の小ネタの番外編です。

以下のような報告をしてからもう3年経ちました。

無事母の葬儀を終えることが出来ました。

僕は父の最期も自宅で看取りました。

父が膵臓癌の末期であることを母に告げたとき、このままどうにかなってしまうのでは？と思うくらい母はガタガタと震えました。

でも激しく動揺したのは最初だけ。あとはいつものように明るく、優しく、父を笑わせながら、そのじつ懸命な看病を母は続けました。今でも、母は一体いつ寝ていたのだろう？と不思議に思います。

父の死期が近づいたころ、夜中に母がそっと様子をうかがっていると、父が急に「お前、そこにおるんやろ」と言ったそうです。

「お前は明日また俺の世話をせんならん、そやで寝てくれ」そして、

「俺はお前が可愛ようてどむならんのや」と言ったそうです。

母はそのひと言を支えに、父が亡くなってからの24年間を生きて来ました。

母は無欲な人でしたが、唯一のわがまは、この家で死にたいということでした。幼馴染であった8人兄弟の次男と11人兄弟の三女が、それぞれ20歳と18歳のときに結婚しました。ままごとのような夫婦やったと、祖父や伯父が笑いながら何度も話してくれました。

無一文からスタートした二人が力を合わせて建てた家。父との思い出がぎっしり詰まった大事な家。ここで父と同じように最期を迎えたいというのは、わがままなどではなく、当然の希望です。母は最後まで健気な女性でした。

小指絡めむ梅雨寒を逝く母と 合掌